

インターリンガルな言語実践

— 混淆と閉塞のキップリング〈方言〉学 —

上 石 実加子

I have never been able to read Kipling calmly.

— Sulman Rushdie¹

1. はじめに — 胸騒ぎを覚えるテキスト

一つの文学テキストが一つの言語だけで書かれるのではなく、多言語の混成によって成り立つ例は、もはや20世紀文学においては当たり前のものになりつつある。ことに英米文学においていうなら、いまや「英語」だけを表現媒体としないテキスト群が、異言語の混成とあいまってハイブリッドな文化性を創出し、さまざまな枠組みを解体する契機となって、〈英米文学〉から〈英語圏文学〉へのパラダイム変換を始動させている。

しかし、19世紀後半イギリスの、特にキップリング〈文学〉について考える場合、彼の言語実践はあまり肯定的に論じられるものではないのかもしれない。これはひとえに、キップリングという作者に付された帝国主義擁護論者としてのレターによるものである。彼のあまりにも有名な「白人の責務」“White man's burden”をうたった詩句は、優越した位置にある自分たちが、大国イギリスの庇護のもとにある植民地や勢力圏内の人々に、文明の恩恵を与え、彼らを「文明化」する使命を背負っている「帝国意識」²を高らかに謳いあげるものであったことに加え、民族的優越意識と大国の国民としての愛国心が、好戦的ジンゴイズムへと容易に転化されるなかに、キップリング文学がその意識の代弁者となりえたことが、もはや周知の事実となっているからである。

同時に、しかしながら、描かれる事物や人物があわせもつ様々な矛盾が、一枚岩的な帝国主義像を揺るがすとする、キップリングのテキストのアンビヴァレンスに注目する近年の論調は、キップリング文学の新たな可能性を追求する試みとして注目すべきところであるものの、キップリングのテキストに見受けられる人種に対する偏狭というものが、同時代的意向を反映した結果の産物であったとする理由づけ

が存在してしまうこともまた確かである。サルマン・ラシュディは、彼のキップリング論の中で、こうした理由づけによる人種的偏狭の正当化は、かつてのナチス・ドイツの反ユダヤ政策を歴史的不可抗力として容認することができないのと同じくらい許されないものとしながらも、エッセイの最後で、「キップリングのテキストには、いつも許し難いと思えるところはたくさんあるのだが、同時に真実もたくさん含まれていて、どうしても無視することができない」³と締めくくっている。

本論は、キップリングのテキストに見られる言語の混濁性について考察するものである。彼のテキストは、英語をその基礎言語としながらも、いわゆる「英語」以外の言語が混在したテキスト群が多く散見される。それは登場人物たちの会話に限定的にあらわれるものであるが、「英語」のなかにインド諸言語が混ざっていたり、「英語」をいわば辞書にあるように「正しく」発音しない〈音声〉の異質性が強調され、読者に対して、殊更に言語意識を強制させるテキストとなっているといってもよい。その根拠は、すなわち描かれた登場人物たちが、すべて何らかの意味で辺境に位置する人物たちであるという裏返しとして成り立つ。さらに、「キップリングのテキストを決して“calmly”に読めたことがなかった」とするラシュディの言葉は、キップリングのテキストが、彼に〈胸騒ぎ〉を起こさせるものであったことを物語っている。混成した言語から立ち現れてくる〈ノイズ〉ともいえるような、テキストから聞こえてくるさまざまな雑音に満ちたざわめきが、心理的に訴えるものであったとされる、そのキップリングの言語実践というものは、いかなるものであったのだろうか。本論は、彼の言語実践から浮かび上がる「言語」という概念が、当時いかなる編成のプロセスを辿ったかを検証しつつ、キップリングの言語実践との相関関係を探るものである。

2. 方言使用の意図 —— テキストの戦略

英語のなかに異言語を混ぜること、ことにそれが被植民地の言語であった場合、その言語実践が英語帝国主義を振りかざすものへと変貌することはまた、キップリング文学において回避できない注目点であることは前述のとおりである。それは、英語のある単語を正確に発音できない「インド人」を、英語のみを使用言語として書いたテキストにおいて顕著となるといってよい。まずはその例を、*Plain Tales from the Hills* (1888) に収録された “Beyond the Pale” において見てみたい。

この話は、アングロ・インディアンの主人公トレジャゴ (Trejago) が、若いインド人の未亡人ビセサ (Bisesa) と領分を越えた恋に落ちる話である。ここでは二人の会話が直接話法で書かれることが少ない。ビセサが話す場面は、彼女がトレジャ

ゴの浮気を責めるという一箇所のみである。そこでのピセサの言葉を参照してみる。トレジャゴは、ピセサが西洋的な考え方を分かっていないのだと、彼女を説得しようとするのだが、彼女はこう言っている。

'I do not [know]. I know only this — it is not good that I should have made you dearer than my own heart to me, Sahib. You are an Englishman. I am only a black girl' — she was fairer than bar-gold in the Mint, — 'and the widow of a black man.' (PTH 160)

ここではピセサの話す英語は、例えば、キップリングの他の短編において見られるような、インド人が英語を話したときの独特の発音をそのまま表記した英語にはなっておらず、文法は別にしても、イギリス人が話すであろう英語とあまり変わりはない。しかし下線部に示したように、ピセサの発言のあいだに挿入された、ピセサについての説明が、このピセサの発話全体すらも、ピセサの発話をありのまま記したというよりも、むしろ修正がほどこされていることを示すものになっている。一見すると、ピセサの話す英語は、インド人が話す「英語」を特別意識させるものにはなっていない。しかしピセサは、トレジャゴの名字である 'Christopher' を「正確に」発音できないとされている。

Bisesa was an endless delight to Trejago. She was as ignorant as a bird; and her distorted versions of the rumours from the outside world, that had reached her in her room, amused Trejago almost as much as her lisping attempts to pronounce his name — 'Christopher.' The first syllable was always more than she could manage, and she made funny little gestures with her roseleaf hands, as one throwing the name away, and then, kneeling before Trejago, asked him, exactly as an Englishwoman would do, if he were sure he loved her. (PTH 159)

トレジャゴが、ピセサを一貫して東洋の無知で無垢な少女として見ているのが感じられる上記の引用は、イギリスにとってのオリエンタルな他者としてのピセサを浮き彫りにするものであり、加えて、彼女がトレジャゴのファースト・ネームを「正確に」発音できない、愛らしくも滑稽な姿が、かえってイギリスと東洋の差異に優劣を組み込むことになっていると指摘されても仕方のないことかもしれない。

※

次に、英語と異言語が混在するテキストを考えるが、その中でも作者キップリングが異言語を使用した意図がわかるテキストを例にとり、異言語混在のテキスト生成に、作者の意図が介在していることを確認しておきたい。

Just So Stories (1902)のなかに“The Crab that Played with the Sea” (1902)という短編がある。この短編では、英語のなかにマレー語が混在する構成になっているが、次のようなセンテンスがでてくる。

① “*Kun?*” said All-the-Elephant-there-was, meaning, “Is this right?”

② “*Payah kun,*” said the Eldest Magician, meaning, “That is quite right.”

(*JSS* 144)

①②の両方に出てくる“*kun*”は、この物語のなかで何度も繰り返して出てくる言葉であるが、上記のようにこの翻訳が“*right*”を意味するとして用いられていることがわかる。しかしこれは誤りで、マレー語で“*right*”に相当する語は“*baik*”もしくは“*betul*”であり、そのマレー語の使い方が間違っているという指摘がある⁴。また、この短編は、ウィリアム・スキート (Walter William Skeat, 1835-1912, 言語学者、語源辞典を編纂) の *Malay Magic* (1900) を下敷きにして書かれたものであることが分かっているが、スキートのマレー語による天地創造の伝説は次のようにしてはじまっている。

③ “*Kun*” kata Allah, payah “*kun*” kata Muhammad: Menjadi benih...⁵

アラビア語で“*Kun*”は英語の“*be*”に相当する。ここでは命令形で“*Let there be*”となり、よって、この伝説の冒頭は、“*Let there be,*” said Allah, likewise “*Let there be,*” said Muhammad: a seed was created...、となるという指摘がある⁶。スキートはこのマレー語を、次のような文になるとして解説している：“*Kun,*” said God, “*Payah kun,*” said Muhammad, and a seed was created. スキートの脚注には、“*payah*”はおそらく“*supaya*”の転訛で“*so also*”あるいは“*likewise*”という意味になるとある⁷。

このスキートの文と、キップリングの②を比較してみる。スキートは③の *payah* “*kun*” を、“*payah kun*”としていることに注目したい。キップリングの②は、スキートによる変更を踏襲しているらしいことが読みとれる。また、キップリングの物語において登場する蟹の名前が *Pau Amma* というが、この *Pau* は「マンゴー」を意味

する語としてマレー語にあるが、Ammaのような名前はないらしい。

なお、キップリングはスキートから実は彼の著書 *Malay Magic* (1900) を送られており、それを下敷きにしてこの短編を 1902 年に執筆・出版している。以下は 1935 年 1 月 5 日に、キップリングがスキートに宛てた手紙の一部である。

You sent me, years ago, your *Malay Magic* out of which I took (“pinched” is another word for it) my tale of “The Crab that Played with the Sea”, and used your Eldest Magician, including the phrase Kun, Paya Kun; the Rat; the Man in the Moon; Rajas Moyong Kaban and Abdullah; the Pusat Tasek, etc., etc. The evidence of this “adaptation” is as plain as print...⁸

キップリングが “The Crab that Played with the Sea” のなかでスキートのマレー伝説を参考しているのは、天地創造についてと、潮流の原因となった蟹についての二箇所である。キップリングがスキート宛ての手紙において “pinched” という単語を使っていることからわかるように、彼はかなり気まぐれに、その意味に忠実でなくとも恣意的に、マレー語をテキストに用いていることがうかがえる。スキートの *Malay Magic* の裏表紙には、キップリングの言葉の抜粋が引用されており⁹、二人の交友関係はもはや明らかであるが、このスキートが、語源学者であったということを考えるに、キップリングの言語的関心の高さがある程度想定することは可能であろう。

かつてキップリングは、フレデリック・カウルズ (Frederick Cowles) という見習作家から、自作の作品を送られてコメントを求められたということがあった。これは、1893 年 7 月 19 日宛てのキップリングからカウルズへの書簡において明らかであるが、キップリングがカウルズに対してきわめて実用的なアドバイスをして激励しているのがわかる。例えば短編のタイトルについてであるが、カウルズがつけたタイトル「ジム」「Jim」はありきたりだとして、キップリングが具体的に代案まで出している¹⁰。そして、この手紙のなかで注目すべきは、キップリングが方言使用に関して述べている箇所である。以下に引用する。

The dialect is unnecessarily misspelled. All you have to do is to give the reader a notion of the dialect. If he knows it he will read in the rest. If he does not no amount of commas and elisions will help him.¹¹

読者に方言であるとわからせればいいのであって、もし読者がその方言を知って

いれば、残りの部分を読んで分かるだろうし、もし知らなければ、コンマや省略がいくらあっても読者には何の役にも立たない、とするこのキップリングの忠告には、キップリング自身が方言を文字化してテキストに移し変えるときの彼の意図というべきものが表現されている。方言使用は、読者に言語意識を強制させるキップリングの意図であるといえる。だが、その方言使用をテキスト上で実践したキップリングが、その意図を読者に上手く伝えているかどうかは、後述するように全くの別問題であった。

3. ダイアレクトかイディオレクトか—— 混淆と閉塞

キップリングは、ウルドゥー語（印欧語族 Indic 語派の主要な言語でパキスタンの公用語、またインドでも多く用いる）をはじめとして、ヒンドゥスターニ語（北部インド・パキスタンで広く用いられる言語；その文語変種はインドでは Hindi、パキスタンでは Urdu としてそれぞれの公用語）——つまりインド・パキスタン亜大陸のリンガフランカ（lingua franca, 一般に異民族間の混成共通語、仲介語、意志伝達の掛け橋となるもの）についてよく知っていたといわれる。特にパンジャブ語（印欧語族 Indic 語派のひとつ）には精通していたようだが、実際、キップリングは英語を話せるようになるずっと以前に、ウルドゥー語を習得している。インドで生まれた彼は、幼い頃、インド人の召使いであるミータ（Meeta）と終始その土地の方言で話していた。彼が自身のボンベイでの幼年時代について自叙伝で書いていることは、ウルドゥー語もしくはヒンドゥスターニ語は、その語で「物事を考え、夢を見る」¹² 土地なまりの方言（vernacular idiom）であったということである。イギリスで教育を受ける前の幼年時にミータとの会話によって培われた、キップリングの方言使用は、乳母から注意をうけるほど上達し、実際、夕食時に両親と話をする際、逆に土地言葉から英語に翻訳することによって英語を思い出し、非常にたどたどしく「英語」を話したと言われている。1882年、キップリングはラホルの『シヴィル&ミリタリー・ガゼット』（*Civil and Military Gazette*）新聞社に就職するためにインドに戻る。イギリスでの教育を終えた彼は、このときまでに、ウルドゥー語をすっかり忘れてしまっていたようだが、ボンベイに到着した瞬間に、子供時代に覚えた言葉やフレーズが口について出てきたと *Something of Myself* (1937) のなかで回想している¹³。キップリングにとって、ウルドゥー語をはじめとするインドでのリンガフランカは、彼が英国人の血をもちつつも、れっきとした英語話者となるまえに習得した「言語」であったことをふまえておく必要があるだろう。

キップリングの数々の作品には、いたるところに、アラビア語、ペルシア語、ウ

ルドゥー語、ヒンディー語、そしてパンジャブ語の言葉やフレーズがちりばめられている。これらの言語は必ずしも英語に翻訳されているわけではないのだが、このような、大部分は英語で書かれたものに土地言葉を混合させているテキスト上の戦略は、次のような3つの効果を生み出していると考えられる。

- ① アングロー・インディアンという限られたの読者の共感をさそう。
- ② インドを知らない英語話者に対し、「音」からインドの情景を浮かび上がらせる。
- ③ 現地言葉を直接引用することによって、視覚的にも聴覚的にも、テキストに臨場感を与えつつ、同時に差異を生み出している。

キップリングの執筆活動は、前述のように、インドの新聞社の編集の仕事とはじめられた。よってその当時は、限られたアングロー・インディアンの読者を念頭においてものを書いていたことになる。インドの言葉やフレーズが散りばめられていることは、①のようにアングロー・インディアンの読者にとって魅力を付け加えることになったと想像できる。しかしながら同時にまた、②のようにキップリングは、インドものの作品群のみならず、一般の英語話者を対象にしたと思われる後期の作品群にも同様に、インド・パキスタン言語を使用している。これは彼がオリエンタルな言語をひけらかしているというよりもむしろ、ヴァージニア・ウルフの夫レナード (Leonard Woolf) がみずからのセイロン体験を綴った自伝の一節で「白人たちは多くの点で驚くほどキップリングの描く人物に似ていた。それは、キップリングがインドにいるイギリス人をモデルにして正確に人物を造型したのか、それともわれわれがキップリングの作品上の人物をモデルにして自分たちの人間像を作っているのか、判断がつきかねた」¹⁴と記しているように、インドにおける言語混淆の実態をリアリスティックに伝えるための有効な装置となっているのである。また、インドに一度も行ったことのない政治家が、キップリングの「インドもの」を熟読することによってインドがどのような場所かを理解したといった挿話にも事欠かない¹⁵。

土地言葉によってその状況や会話が生き生きしたものとなっている例は、特に兵士ものの物語群に見られるとあってよい。インド駐留英軍のアイルランド人兵士マルヴェイニー (Mulvaney)、臆病で小柄なコックニーのオーセリス (Ortheris)、大柄でぶきつちよなヨークシア人のリアロイド (Learoyd) が登場する物語群“On Greenhow Hill,” “The Courting of Dinah Shadd” (両者とも *Life's Handicap* に所収)、“His Private Honour” (*Many Inventions* に所収) などはほんの一例にすぎないが、“Dray Wara Yow Dee” (*In Black and White* に所収) や “In the Presence” (*A Diversity of Creatures* に所収) など、インド人によって語られる話は、ありのままの現地こと

ばに近い精巧で威厳のあるマナーで話しているという指摘もある¹⁶。一例としてリアロイドが登場する“The Three Musketeers”(1887)をみしてみる。

I purshued a *Hekka*, an' I sez to the dhriver-divil, I sez, 'Ye black limb, there's a Sahib comin' for this *hekka*. He wants to go *jildi* to the Padsahi *Jehannum ke marfik*, *mallum*-like Hell? 'Tis no manner av use *bukkin'* to the Sahib, bekaze he doesn't *samjao* your talk. Av he bolos anything, just you *choop* and *chel*. *Dekker?* Go arsty for the first *arder-mile* from canton-mints. Thin *chel*, *Shaitan ke marfik*, an' the chooper you *choops* an' the *jildier* you *chels* the better *kooshy* will that Sahib be; an' here's a rupee for ye. (PTH 66-7)

こうした兵士の話す混淆した言語は、英領インドの陸軍に従事した者にとっては、リアリズムを感じさせる機能をもつであろう。シャムル・イズラム (Shamul Islam) は、英語を使用言語とする読者が、上記にみられるような土地言葉を知っている必要はないと指摘する。というのも、このリアロイドの話しぶりが、その言葉や音、調子といったものとあいまって、まさに兵士リアロイドの荒っぽい性格を投影しているからであるとする¹⁷。異国の言語の音声によって作り出される雰囲気を理解するだけで充分だということである。

この②の考え方は③と当然重なる部分がある。インドは西洋にとって、神秘や美、暑い気候、托鉢僧、ジャングル、象、あるいはエキゾチックな乙女たちというものと結びつけられてきた。そして16世紀、17世紀、18世紀、19世紀と、ヨーロッパ文学は概してインドをはじめとする東洋について、このようなロマンティックな概念を抱いてきたといってよい。キップリングは、まさに言葉によって読者の心の中に〈インド〉を現出させるという、昔からのオリエンタリズム的な連想をつねに戦略として活用している。彼は、インドの内外に精通している者のごとく書いているが、しかし彼は、何らかのかたちでミステリーや驚異の感覚、そしてインドに対する「隔たり」の感覚を維持しつつ、それを強調しているのである。“In the House of Suddhoo”(1886)において印形彫刻士 (seal-cutter) がおこなうインド魔法、手品 (jadoo work) のパフォーマンスが描かれる。それをみている登場人物ジャヌー (Janoo) がウルドゥー語で叫ぶ言葉：“Asli nahin! Fareib”という言葉は翻訳されていない¹⁸。イズラムによればこれは“not real! Fraud”という英訳になる¹⁹ようだが、翻訳されないことによって、この言葉の持つ音が、ミステリーや驚異の感覚を倍増させる役割を果たしているといえるだろう。ラシュディは、*Soldiers Three* や *In Black and White* に登場する声を与えられたインド人たちが、多くの場合、本当

は英語を話してはいないことを指摘し、さらに、こうした“Indiaspeak”の多くは、‘Aho! Aho!’や‘Ahi! Ahi!’といったような感嘆の表現であることが多く、そのことによって、インド人たちが激発的なほとばしる感情しか持ち得ないことを示唆するものだと指摘²⁰し、イディオレクトであるとしている。また、オーセリスの話すコックニーには、アポストロフィーによる文字の省略が多く、ジョージ・オーウェルも、キップリングの詩にみられる下層階級の話し言葉を模倣したものが、歪んだ階級的視点でものを見ていると指摘している²¹。

彼の描くインドは、インドを知らない西洋人に〈インド〉に関する情報を与えるようなある種のリアル感がある。彼の方言使用はこの効果に一役かっている。しかしながら同時に、その言語に精通していない読者とのあいだに距離を作り出す要因ともなりえている。このような意味において、キップリングの例えばウルドゥー語使用は、「掛かり合い」と「無関心」というオキシモロ的な奇妙な効果を確認することに成功しているといえるのかもしれない。

“Without Benefit of Clergy”(1890)を例にとってみてみよう。イギリス人とインド人の恋愛の悲劇は“Beyond the Pale”も同様のテーマを扱っているが、次の引用は、ホールデン(Holeden)とアミーラ(Ameera)が、生まれたばかりの息子の命名について議論する箇所である。

“Then call him Tota, for that is likest English.”

“Ay, Tota, and that is still the parrot. Forgive me, my Lord, for minutue ago, but in truth he is too little to wear all the weight of Mian Mittu for name. He shall be Tota-our Tota to us. Hearst thou, O small one? Littlest, thou art Tota.” She touched the child’s cheek, and he waking wailed, and it was necessary to return him to his mother, who soothed him with the wonderful rhyme of *Are koko, Jare koko*. (LH 146)

このウルドゥー語のフレーズが組み合わせさせたドラマティックな会話は、場面を生き生きとリアルにさせているが、同時に、‘Tota,’ ‘Mian Mittu,’ ‘Are koko,’ ‘Jare koko’といったウルドゥー語²²が、英語話者である読者、特にイギリス人読者に、遠く離れたところの体験であるようなエキゾチックな気持ちにさせている。

方言をテキストにそのまま表記する音声としての文字化、そしてそれが文学にもたらす効果は、特にキップリングのようなアングロ・インディアンの作家においては複雑なものとなる。

キップリングの幾分意図的な方言使用は、おそらく確実に「キップリング風」

“Kiplingesque”なるものの構成要素の一端をなすものであったに違いない。例えば、ハリー・リケッツが“Kiplingesque”と言うとき、それは、詩集 *Barrack-Room Ballads* における トミー・アトキンス (Tommy Atkins) という英陸軍の白人兵卒に対する同情的な要素、あるいは同詩集に収録の“Danny Deever,” “Tommy,” “Fuzzy-Wuzzy,” “The Widow at Windsor” などといった詩が共有しているもの、つまり“common touch”であった²³。形式、内容、イディオムにおいて、それらは正真正銘、一般向きで、即座に歌や朗誦としてポピュラーになったのである。コックニーの方言で書かれたそのバラッドは、力強いユーモアと時には感傷的なベースをもつて、生活の辛苦や友情を表現するものであった。兵士たち自身に訴えかけたものは、彼らの境遇をキップリングが本当の意味で理解していると思わせることであり、その要因は、彼の方言使用にあったのだといえるのである。

キップリングは、前述したように、インド諸言語からなるイディオレクトのみならず、いわゆる German-English ともいふべきドイツ語なまりの英語も用いて、いくつものテキストを作成している。これは、1860年代からアメリカをはじめ、ヨーロッパでも大ブレイクとなったチャールズ・リーランドの (Charles Leland, 1824-1903) 「ハンス・ブライトマン」バラッド (Hans Breitmann Ballads) の影響によるものであることが分かっているが、リーランドとの関係については、稿をあらためて論じたい。

19世紀末、アメリカではこのリーランドが火付け役となって、いわゆる方言詩というジャンルが確立してくることに目を向ける必要がある。キップリングは1894年、アメリカであの『ジャングル・ブック』(*The Jungle Book*) を発表する前年の、1893年春、妻キャリーとのニューヨークへの旅行の際に、マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910) やウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells, 1837-1920) と出会い、同年10月、アメリカ著作者協会 (The Association of American Authors) に参加し、アメリカの文人たちと交流をはかっている。リケッツによれば、ニューヨーク旅行において、キップリングが、地方作家として知られるハムリン・ガーランド (Hamlin Garland, 1860-1940) や方言詩人のジェームス・ライリー (James Riley, 1849-1916) とも知り合いになっており、キップリングがライリーの詩“*That Young Un*”を熱狂的に賞賛したというエピソードを紹介している²⁴。ガーランドはキップリングのことを、「口調が植民地風で早口な、ユーモラスな人」として回想しているとあり、キップリングは夕食後、コブラや台風、熱帯地方の熱、風のない海洋、トラの吠えるジャングル、そして、とくに象のことを話してライリーやガーランドを楽しませ、ガーランド曰くキップリングは「睡眠状態にあるような話し手」(a hypnotic talker) であったと伝えられている。

4. 言語帝国主義 —— 「標準英語」と「方言」

キップリングの言語の混淆性と、当時の文壇におけるちょっとした方言詩ブームとの関係性は、さらに欧米の、ことにヨーロッパで隆盛する言語的関心とパラレルの関係にあったと考えねばならないだろう。言語的関心、それは、異文化・異言語との出会いから自国語を見直す意識との連鎖関係から生まれた学問分野にみることができる。例えば、1783年にインドに渡った東洋学者ウィリアム・ジョーンズ卿 (Sir William Jones, 1746-94) がサンスクリット語に興味を持ち、翌1784年、ベンガル・アジア協会 (Asiatic Society of Bengal) を創設するが、1786年2月2日の第三周年記念講演 (The Third Anniversary Discourse) において、インドの古典語であるサンスクリット語が、ギリシア語やラテン語と直接比較できる共通した特徴が見られ、基本的語彙と文法的構造の要素を有すると指摘した上で、これは偶然の一致ではなく、共通の祖語から発生しているためだとする発言をしたことで、言語間の歴史的関係の熱心な研究がヨーロッパで行われていくことになる。ジョーンズ卿の声明が契機となって、19世紀における、印欧語比較 (歴史) 言語学という近代的学問が急速に発達したことはもはや周知の事実となっている。

こうした未知の祖語をめぐるロマンティズムたどよう言語進化を辿る試みは、グリム、ポップと受け継がれ、シュレーゲルの「インド人の言語と知性について」を契機として本格化してくる。イギリスに比較言語学が普及してくるのは1830年代まで待たなければならなかったが、〈百科事典〉から〈言葉の辞典〉²⁵としての英語辞典をはじめて編纂した、18世紀ジョンソンによる〈言語アカデミー思想〉²⁶を根底とする英語辞典をきっかけとして英語辞書編纂の動きも高まり、1842年にはロンドン言語学会 (The Philological Society of London) が設立され、比較言語学の方法と成果を取り入れた『オクスフォード英語辞典』 (*The Oxford English Dictionary*) を頂点として英語の〈規範〉が整備されてくることになる。

「規範」に向けての英語の〈標準化〉は、その後19世紀にいたるまで注意深く、意識的に、かつ持続的に行われ、*OED* を頂点としてこのような「標準」英語の辞書は完成したのである。「標準英語」の辞書は、2世紀以上にわたって主に〈教養ある〉人びとの書き言葉を扱ってきた。「標準英語」の辞書に見られる語はすべて引用によって裏づけされたものであることは言うまでもない。これらはしかるべき人が、ある特定の語を容認可能な〈標準英語〉で書こうときわめて意識的に使用した、という「書かれた」証拠であるのだ。「標準英語」が変動しない傾向をもつのは〈教養ある〉人々が辞書や文法の中で保存されてきたとおりに当該英語を使うということに「同意した」からであり、したがってそれ以外の使用法は避けるように仕向け

られてきたからである。

*OED*の編纂は1888年にはじまり1928年にやっと初版が完成した。その一方で、ウィリアム・スキート(1835-1912)による『英語語源辞典』(*Etymological Dictionary of the English Language*)の初版が1879年から1889年にかけて出てくる。また、1873年には英語方言学会(The English Dialect Society)が設立され、1898年から1905年にわたって、6巻から成る『英語方言辞典』(*The English Dialect Dictionary*)をライト(Joseph Wright, 1855-1930)が出している。このような19世紀末の辞書編纂の動きは、印欧言語各派および、個々の言語自体に関する研究業績が長足の進歩をとげつつあった時代を象徴する成果ではあるが、一方で言語の統一化へと進む熱意と運動しているとともに、また一方で、同一起源を拒む「方言」研究への限りない興味を裏づけしている。

初版が1898年に出されたライト編纂の『英語方言辞典』は、1700年以後のイギリス方言に関する唯一の包括的、学術的辞典であるとされる²⁷。各語の使用地域が明示され、発音や直接的語源も示されている。1898年6月にオクスフォードで書かれた、編纂者による〈序〉には、方言はしばしば当該言語の古い時代の姿をとどめていることから、古英語、中英語の音韻組織(phonology)に関連した様々な問題の解明に、この辞書が大いに役立つであろうと述べられている²⁸。さらにこの辞書は、その大部分を英語方言学会による刊行物に拠っているとしている。これはもちろん、*OED*を生んだ母胎が、1842年設立のロンドン言語学会であったことと同様の意味を持っているということだ。1873年、ケンブリッジで創設された英語方言学会には、辞書編纂という明白な目的があったことを裏づける記述である。

英語方言学会の初代会長は、前述の『英語語源辞典』の編纂者でもあるスキートがつとめ、会計をカートメル(J. W. Cartmell)が担当している。1876年に本部はケンブリッジからマンチェスターに移転して会長がスキートからノーダル(J. H. Nordal)に変わり、会計はミルナー(G. Milner)になったが、このマンチェスター本部は1893年まで続き、1893年から今度は本部がオクスフォードに移って、この辞書の編纂者であるライトが会長に就任することになり、1896年まで会は存続することになる。

『英語方言辞典』の刊行は1898年から始まり1905年まで続く。ライトは、この辞書の編纂にあたり、英国全域から資料を収集するのにかかった歳月を23年間と記している。これはまさに英語方言学会が設立された1873年から1896年までの23年間という数字に一致するものである。学会の終わりをライトは次のように述べている。

After the Dictionary had been begun, it was no longer necessary to continue the existence of the Society, and it was accordingly brought to an end in 1896 after it had published 80 volumes, all of which are being incorporated in the Dictionary²⁹.

18世紀後半から19世紀にかけて、長年にわたって伝統的な文学作品の集積が多少なりとも研究し尽くされてしまうと、口語および特に方言に対して従来より大きな注意が払われるようになる。両者は初期段階の研究では比較的軽視されてきた分野であるが、音声学が本来の地位を得て、ヘンリー・スウィート (Henry Sweet, 1845-1912) による、発話の形における語の優位を率直に認識するという先駆的業績が意味をもってくるようになった。言語進化のもっとも根本的な法則は、まず何よりも生きた言語から引き出されるべきであって、その語句が一定の形で文字にされた場合、きわめてゆがんだ反映となることがあるということが認識された。スウィートは、1870年以後、雑誌『アカデミー』(Academy) に書評の筆を取り、英語学に関する新書などの紹介をし、また同じくこの頃、彼は初期英語テキスト協会 (Early English Text Society) (1864年創立) に入会し、古期英語資料の校訂、編纂にたずさわることになった。そして1874年、スウィートは29歳の若さで言語学会の会長に就任している。これは、学会の『会報』(Proceedings) に発表した「英語音史」(“History of English Sounds”) によってその学識を会員にあまねく認められたことによるものだ。彼はこの論文において中世から近代に至る英語の音韻史を通覧し、1877年には『音声学ハンドブック』(Handbook of Phonetics) を著わして現代の口語にまで到達した。なお論文と同名のタイトルで彼が著わした著書『英語音史』(History of English Sounds) は、1888年に出版されたが、これは近代英語の文語が中期英語のロンドン方言に起源をもつとするもので、同年にドイツの学者ローレンツ・モールスバッハ (Lorenz Morsbach, 1850-1945) が同じ内容を記した論文「近代英文語の起源について」(Ueber den Ursprung der neuenglischen Schriftsprache) を発表している。スウィートの『英語音史』は、エリス (A. J. Ellis) の『初期英語の発音』(1869-89) (Early English Pronunciation) とともに、19世紀における英語史上、二大文献と称されている³⁰。19世紀末以来、ヨーロッパにおける言語研究が「現用語法」“living speech”を基礎とする傾向に転じたのは、主としてスウィートの努力によるものであった。

方言研究が人気を集めるようになった背景には、やはり19世紀の半ばごろ、理論的な言語学的考察から生まれた方言学の隆盛がある。やがて本格的な学問としての社会言語学へと成立をみる過程において、「新文法家」(new grammarians) として知

られる 1870 年代後半に出現した言語学者の一派³¹などの一群の学者たちが、言語の本質は死語や書かれた言語よりも、現在話されている近代語において観察されるべきだ、とする見地から、現代語研究の必要性和言語機能の考察の必要性を唱えている。よって彼らが確信した点とは、発音変化は一つの言語集団において一様に変化するものであり、すなわち、言語には構造的な組織があり、一つの言語内での変化はその組織内では首尾一貫しているだろうということであった。しかしながら、その成果は、特にドイツとフランスで全く予期に反するものであったため、この新しい一群の〈言語学〉者は、次第に〈方言学〉者と呼ばれるようになり「言語には全く一様な変化はない」と提唱しはじめるに至ったのである。なお、前述したスウィートは、「新文法家」の主張に著しい共鳴を感じ、なかでもヘルマン・パウル (Hermann Paul, 1846-1921) の名著『言語史原理』(1880) (*Prinzipien der Sprachgeschichte*) に影響をうけて、『言語の実践的研究』(1899) (*Practical Study of Languages*) を書いたとされている。

われわれは今や、言語には〈一様性〉があると信じることもあるものの、本当はそうではないことをも同時に知っている。しかし、各個人は決して孤立した言葉を話す存在ではないことも心得ている。いくつかの言語集団が分解して、通常、〈一様性〉のあるものとなっても、そのなかに様々に違った段階を持つようになる。〈一様性〉の最も少ないのは諸言語間においてであろう。その〈一様性〉が高まることで一つの〈言語〉を形成する。さらにその程度が高まることで、方言が生まれる。ならば〈方言〉すらも〈一様性〉という幻想を携えた学者の創りあげた枠組みに過ぎないのだろうか。

こうして 18 世紀、19 世紀にかけて、きわめて実体的であり疑いえないように見えた「標準英語」が徐々に捉えどころのないものになっていくのは 1920 年代をゆうに過ぎた頃である³²。「標準英語」が現実存在するというのは、物理的な形をとるというよりも、心理的な面の操作によって一層意識化されることによるものようだ。つまり英語を話す大部分の人が、何かある種の権威としての「標準語」を求め、意識の高まりというものと連動するものと考えられる。また、方言辞典は、地理的な差異による言語どうしの差異を扱ったものであることから、しばしば、聞きなれない言語を話す地へ赴いての方言収集という作業は、人類学的、博物学的な興味と連動しているものと考えられるだろう。まさに、19 世紀比較言語学が、民俗学研究に及ぼした影響が大なるものであったように、よって、「口承文芸」という言葉が「フォークロアを近代文学のイデオロギーが収奪するときのラベル」³³として解釈されてくるように、辞書編集者の意図が何であれ、また、彼らが記録した単語の意味変化が偶然であるにもかかわらず、英語の語彙が、〈卑しい〉起源からヴィ

クトリア朝英語の頂点に〈進化〉したという言語進化論が整備されていったのである。

18世紀末から19世紀へと、英語の優越性を信じたために、他の言語に対する敬意が衰え、大英帝国の拡大は、英語の優越性に対する確信を助長した。しかしながら、見逃してはならない点は、1870年代から高まる方言に対する一層学問的な関心は、言語学者たちが〈音〉の変化の規則性を求め始めたことからきているということである。つまり、標準語には規則性を示さないことがすぐにわかったのである。なぜなら、標準語のもとになったのが方言の混合だったからである³⁴。よって、田舎の方言に規則性を求めることから方言調査が生まれ、言語の標準化が進むことによって土地の方言が減ってしまうという危惧から、調査の緊急性が加わり、先にあげたライトなどの方言辞典の編纂に拍車がかかった。

5. 〈ノイズ〉としての文字——差別化か特殊化か

方言の〈音声〉を〈文字〉に翻訳するという考え方は、デリダ流に言えば、音声言語中心主義の体制内での〈音声〉と〈文字〉との関係性が、さまざまな西欧文化の二項対立の階層性の問題に適應されてきたとなろう。音声を文字にする支配者から被支配者への権力にあらわれる階層性が、キップリングのテキスト生成に重ね合わされるのなら、やはり彼の方言使用は差別化へとむかう。しかしながら、「同一項における内的階層性」³⁵ということに考えをむけるなら、ことはそう単純に解釈はできなくなるだろう。

同じことが、〈音声言語〉と〈文字言語〉の体系内にも起きている。たとえば、ある〈音〉は汚く、ある〈音〉は美しく価値があると見做される。(中略)そして、方言間の差別化がある。ある方言の〈音〉は「雅」であり、ある方言の〈音〉は「野卑」だとされる。人間の発しうる可能的〈音声〉は、一体どれだけあるのだろうか。その〈音声〉群の中で、一定の言語体系は有限個の〈音声〉を排他的に選択・使用し、他の〈音声〉は抑圧する。ところが、そうした抑圧・排除される〈音声〉は、制度的にふさわしくないとされるだけに、個人的感情の表出にはいっそう有効となる³⁶。

方言を用いることによって、それがヨーロッパからの優越的な視線にさらされる場合、方言使用は差別化のシステムに組み込まれることとなる。また、それがあこがれの視線に沿って用いられる場合、方言は特殊化されることによって臨場感を生み

出す装置となる。方言を使用することが、物語テキストに何を「付け加える」のか。方言は、確かに、作家が直接介入することなく、その登場人物のキャラクターを雄弁に物語る。方言は、C. S. ルイスの言葉をかりれば、「閉社会」「closed circle”的な同族意識を高める共同体をつくりだす力を持っている³⁷。方言の広範な利用は、少なくとも部分的には個々の集団同士の精神的な緊張関係をも映し出す。内集団の観察に内在する高められた区別の感覚をとおして、特殊性と特異性は、イデオロギー的なものであることを強く主張されもする。キップリングのテキストにときおり顔をのぞかせる、執拗なまでの〈共同体意識〉が、集団というものを、社会に呑み込まれる人間が死よりもむしろ生に近づくことを潜在的に選択させるようなものであると仮定してみる。かくして方言は、ある作品に対して迫真性を付加するよりもむしろ、ナイーヴな道具に過ぎないのかもしれない。このプラスとマイナスは、しかし、実は相対的なものに過ぎないのかもしれない。重要なのは、差別化に向かうか特殊化に向かうかという問題ではなく、その両者の境界をめぐる軋轢が生じているということ、つまりは、境界を乗り越えようとする力と、境界を生み出そうとする力が同時に作用している、その磁場に読者をたたせるのが、方言という言語媒体であるということだ。

英語をめぐる規正化の動きは、辞書編纂をはじめとするアカデミズムが、「言語」を囲い込んでいくことから生み出されるモノリンガルな文学の奨励をうながすこととなった。この標準文語なるものは、実は OE 時代から存在し、それぞれの時代にその規正のされかたに差異はあったものの、英語の固定化は、英語の歴史が 18 世紀末のある時終わったという印象を与えかねないのは、少なくとも書き言葉標準語においては、標準語の形にその後の変化がほとんどなかったからだという³⁸。

しかし、レイモンド・ウィリアムズも指摘するように、1860 年以降、イングランドの階級構造が決定的に変化をとげて、教育のある人々の慣用法が中産階級のそれと同一視されるなかで、この 19 世紀になってはじめて、話し言葉を意味する「標準英語」(“Standard English”)ということを目にするようになり、この「標準」が、もはや共通語ではなくて、基準語の意味を含んで、階級的話し言葉という新しい概念が意識される³⁹。

例えば、キップリングがオーセリスというコックニーを話す人物を登場させているが、ロンドン言葉である「コックニー」のルーツは、Cockney という語が coken-ay (雄鶏の卵)、つまり劣った、価値のないもの、という意味をもつ語からきているが、古くはチョーサーの時代から使われている。しかし、コックニーが使われだした頃には、「わるい英語」(bad English) という観念とは無縁であった⁴⁰。

コックニーがロンドン東部地区の労働者階級の話し言葉へと変化していったこ

と、また、それが徐々に「下層の」「耳障りな」「下品な」という評価を下されるようになったのは、「正しい英語」の規範が求められた 18 世紀のサミュエル・ジョンソンの時代であったわけだが、労働者階級の一般的認識を決定したのは、学問的方言調査ではなく、ヴィクトリア朝時代後期に発布された教育条例であった。1870 年に教育法が発布されるが、それ以前でも、学校教育費の支給は、児童の読み・書き・算術 (Three Rs) の能力テストと結びつけられていたという。1862 年の改正教育令によって、学校は児童 1 人あたり 8 シリングの支払いを受けたが、児童がいずれかの試験で落第すると、その 3 分の 1 を失った⁴¹。このテストは、読み書き能力を測る有用な尺度となるという核心に基づいていたが、読み書き能力の概念自体が貧弱化してきたのである。読み書き能力のある人は、書き言葉を必要とする社会的に有用な仕事を遂行することができる。これは、単語を理解し、それを綴る能力を含むが、これらの能力を実行にうつす能力をも含んでいる。成績によって支給をうけることの効果は、学校教育費支給全体をゆがめることであり、それはまた、言語評価に落第という概念を導入したのである。

貧困に悩むイーストエンド地区では、これらの教育改革はほとんど効果がなかった。つまり、この地区の話し言葉は改革されぬままに終わった。ロンドンの労働者階級の話し言葉が「上品な英語」から離れはじめると、多くのヴィクトリア朝時代の作家たちの注目を引き始める。19 世紀末までには、コックニーは急速に諷刺の対象となって固定概念化されていくことになる。ここに至って、ショーをはじめとする人びとが「コックニー方言」という言い方をはじめすることで、「コックニー」は生活様式はもちろんのこと、話し方とも同義になったのである。もちろん、こういった、通りで話されている言葉をテキストのなかであらわそうと試みた最初の小説化はチャールズ・ディケンズである。彼はその英語で育った。しかし、ディケンズでさえも、その文字化の仕方は不正確であった。

イギリスにおける「英語」をめぐる学問と教育によるさまざまな体制は、明らかに非標準英語を差別化する方向へと導くものであったが、キップリングが主に物語の舞台としたインドにおいて、真の意味での二言語併用がはじまったのは 1835 年である。この年、歴史家のトマス・マコーレーがインド社会教育委員会の委員長として、『イングランドの歴史』(*History of England*) という、ヨーロッパ文化の優越性を徹底的に代弁する著書を出し、マコーレーの主張が直ちに採用され、英語は政治、教育、立身出世の言語となり、インドの威信言語となってはいった。だが、英語を話す大量の行政官や陸軍士官、教育者、宣教師たちがインド亜大陸中に英語を広めた結果、支配者と被支配者のコミュニケーションの手段として広く使われるようになった英語は、「標準英語」では決してなく、Babu 英語、または Cheechee 英

語という被支配者インド人の英語であったことを見逃してはならないだろう。そして、その土壤にねざした言語実践をおこなったキップリング自身もまた、「口調が植民地風」であったことを考えれば、彼の言語実践は、まさにインドでさまざまにひしめく〈ノイズ〉を文字に変えるイディオレクトをうみだしていたのだということになるだろう。

6. むすび

アンソニー・バージェスに表現によると、「英語とインド諸言語との結合は、カルカッタとロンドンの口語表現、シェイクスピアの古文体、パザールの喧騒、人々がとなえるヒンズー教の神々の名、インドの訴訟用語、事務員風英語の苛立った甲高い声、これらすべてをあわせ持つてはじめて完全となる言語」⁴²を生み出した。それは決して〈純正〉な英語ではなく、多くの要素が混入された異言語的な英語にほかならない。インドで話される英語の発音は、最も Pukka (純正) な Oxbridge (オクスフォードかケンブリッジ大学という伝統ある名門大学) 風な明確な発音から、街頭で耳にする不明瞭なピジンに至るまでさまざまであるはずなのだ。「英語」の標準化の頂点をなす『オクスフォード英語辞典』に、インド諸言語からの借用語がいかに多いことか。多種類の言語をもつ国が、多くの声で〈英語〉をつくりかえてしまう英語盗用のプロセスの果てに、キップリングのテキストにおける言語実践はみえてくるのである。

文語的であろうと慣用的であろうと、インド英語の形成は、イギリス社会の親インド派の要素とインド文化の革新的かつ即応的要素との結合からうまれたものである。その前者の代表するのがキップリングであったという指摘⁴³すらある。キップリングのテクスチュアルな実践は、単に英語を基礎語として異言語を混在させる英語帝国主義なのであろうか。いや、むしろ、彼の言語実践は、「英語」と「異言語」というバイリンガルな実践のうえにあるものではない。彼のテキストにあらわれる「英語」というある種完結した概念を突き崩す〈英語〉と、異言語との双方向的な借用・移入のすえに、まさに、「英語」と「インド諸言語」の中間からしか立ち上がってこない、〈インターリンガル〉な言語実践であったというべきなのではないだろうか。

注

キップリングのテキストは、The Mandalay edition of the works of Rudyard Kipling (New York: Doubleday, Page, 1927) のシリーズ全 14 巻を使用。引用に際しては以下の省略記号を用い、括弧内にページ数を明記した。PTH, *Plain Tales From the Hills, 1886-1887*; JSS, *Just So Stories for Little Children*; LH, *Life's Handicap*。本文に施されている下線およびイタリックはすべて筆者によるものである。

- 1 Salman Rushdie, *Imaginary Homelands: Essays and Criticism 1981-1991*. (London: Granta Books, 1991), 74.
- 2 木畑洋一「イギリス帝国主義と帝国意識」北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』（世界思想社、1999年）、30頁。ここでいう「帝国意識」とは、「他民族に対する帝国主義支配を支え正当化する意識＝心情」であり、「世界政治の中で力を有し地球上の他民族に対して強大な影響力を及ぼす帝国支配圏に自分が属しているという意識であり、それは自国に従属している民族への人種的差別感に基づく侮蔑感と自民族についての優越感とに支えられていた」(25頁)意識という意味で使用。
- 3 Salman Rushdie, 80.
- 4 B. E. Smythies, "Three More or Less Malay Phrases," *Kipling Journal* 60: 237. (London, 1986), 35.
- 5 Walter William Skeat, 1900. *Malay Magic: being An Introduction to the Folklore and Popular Religion of the Malay Peninsula*. (London: Benjamin Blom, 1972), 584.
- 6 B. E. Smythies, 35.
- 7 Walter William Skeat, 4.
- 8 B. E. Smythies, 35.
- 9 "The cry of hosts [we] humour
Ah! Slowly, toward the light."
Rudyard Kipling
- 10 Thomas Pinney, ed., *The Letters of Rudyard Kipling 1890-99*. Volume 2. (London: Macmillan, 1990), 104. ちなみに代案は "The Female of his Species", "A little Progress", "Progressive Euchre", "Ace Orson of Black Hawk" といったいかにも個性的なタイトルである。
- 11 *Ibid.*
- 12 Rudyard Kipling, 1937. *Something of Myself*. (New Delhi: AES Reprint, 1997), 3.
- 13 *Ibid.*, 39.
- 14 Leonard Woolf, *Growing: An Autobiography of the Years 1904-1911*. (London: The Hogarth Press, 1961), 46.
- 15 小泉允雄「英国文学にみる帝国意識の生成と崩壊」北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』（世界思想社、1999年）、53-86頁を参照。
- 16 Dennis Duffy, "Kipling and the Dialect of the Tribe," *Dalhousie Review*. 47 (1967), 344.
- 17 Shamul Islam, "Kipling's Use of Indo-Pakistani Languages," *Kipling Journal*. 171 (London, 1969), 17.
- 18 同様の指摘が、Don Randall, *Kipling's Imperial Boy: Adolescence and Cultural Hybridity*. (New York: Palgrave, 2000), 149-50. にある。ここでも翻訳されない "subcontinental languages" とのハイブリッドな言語実践について指摘があり、特に *Kim* について「必要以上にハイブリッド」であるとの言及がある。言語的ハイブリッドについては Robert J. C. Young, *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race*. (London and New York: Routledge, 1995), 20-2. を参照。
- 19 Shamul Islam, 18.

- 20 Salman Rushdie, 77. ラシュディはこうして言語が混成された会話体がキップリングのイデオレクトであるとしている。
- 21 George Orwell, “Rudyard Kipling,” eds., Sonia Orwell and Ian Angus, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*. Volume 2. (Penguin Books, 1970), 221. [川端康雄編『G・オーウェル 鯨の腹のなかで』オーウェル評論集 3, 平凡社ライブラリー, 1995年], 208頁。
- 22 Shamul Islam, 18. イズラムは不自然なウルドゥー語だと指摘している。
- 23 Harry Ricketts, *The Unforgiving Minute: A Life of Rudyard Kipling*. (London: Chatto & Windus, 1999), 162.
- 24 *Ibid.*, 197-8 参照。1890年にキップリングは“To James Whitcomb Riley”と題する詩を書いており、ライリーとの関係性がうかがえる。リケッツは地方的な主題を持ち、土地ことばを使用する作家として、キップリングとライリーの共通点を指摘している。
- 25 *OED*に至るまでの主要な英語辞書をあげると次のようになる。
 Robert Cawdrey. *A Table Alphabeticall*. (1604)
 John Bullokar. *An English Expositor*. (1616)
 Henry Cockeram. *The English Dictionarie*. (1623)
 Thomas Blount. *Glossographia*. (1656)
 Edward Phillips. *The New World of English Words*. (1658)
 Elisha Coles. *An English Dictionary*. (1676)
 Edward Phillips. *The New World of Words, corrected, and improved by John Kersey*. (1706)
 Nathan Bailey. *An Universal Etymological English Dictionary*. (1721)
 Nathan Bailey. *Dictionarium Britannicum*. (1730, 1736)
 Samuel Johnson. *A Dictionary of the English Language*. (2 vols., 1755)
 Thomas Sheridan. *A General Dictionary of the English Language*. (2 vols., 1780)
 John Walker. *A Critical Pronouncing Dictionary and Expositor of the English Language*. (1791)
 Charles Richardson. *A New Dictionary of the English Language*. (2 vols., 1836-37)
- コードリーによる平明な英語の辞書、難解単語集として英語辞書は出発し、17, 8世紀における学問の普及と識字層の拡大に呼応して、ベイリーまでの辞書は、前例にならったいわゆる百科事典的な情報累積の英語辞書であった。書名に“dictionary”を用いたのはコカラムが最初ではあるが、大陸の新しい言語思想に立脚して英語辞書を編纂したのはジョンソンがはじめてということになる。
- 26 母国語を育成、浄化し、ラテン語に劣らぬ文化語の地位にまで高め、のちにはそれを「固定」して「変動」や「墮落」から守ろうという考え。
- 27 永嶋大典『英米の辞書——歴史と現状』（研究社、1974年）によれば、次のようにこの辞書の初版は1898年ではなく1896年から1905年となっている（182頁）：Joseph Wright, *The English Dialect Dictionary*. 6 vols. London: Messrs. Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent & Co., Ltd., 1896-1905. また、佐々木達『言語の諸相』第2版（三省堂、1972年）によれば、ライトは1881年に『英語方言辞典』の編纂を引き受け、資料の一層の充実をはかったが、Clarendon Pressをはじめとするイギリスの出版社が、いずれも事業の成功を危ぶんで引き受けなかったため、1895年に本格的な編集活動に入ったとある（463-64頁）。
- 28 Joseph Wright, ed., 1898. *The English Dialect Dictionary*. 2 vols. (London: Oxford University Press, 1970), vi.
- 29 *Ibid.*, vii.
- 30 佐々木達『言語の諸相』第2版（三省堂、1972年）、450-51頁。
- 31 スコット・ベアード『英語方言の諸相』松村好浩訳（研究社、1976年）、2頁。ベアードによれ

ば、neo-grammarians あるいはドイツ語で Jung Grammatiker とも言われる。August Leskien, 1840-1916; Karl Brugmann, 1849-1919; Berthold Delbruck, 1842-1922; Hermann Paul, 1846-1921 などがいる。

- 32 前掲書、160 頁。
- 33 今福龍太・四方田犬彦「二十世紀的移動のゆくえ」『越境する世界文学』（河出書房新社、1992 年 12 月）、89 頁。
- 34 J. A. Simpson and E. S. C. Weiner, eds., *The Oxford English Dictionary*. Second edition (Oxford: Clarendon Press, 1989), xxv. この序文には次のように標準英語そのもの方言的起源が言及されている。: Down to the Fifteenth Century the language existed only in dialects, all of which had a literary standing: during this period, therefore, words and forms of all dialects are admitted on an equal footing into the Dictionary.
- 35 荒木正純「<defferAnce> と <空>」富山佳夫編『批評のヴィジョン』（研究社、2001 年）、30 頁。
- 36 荒木正純、前掲書、31 頁。
- 37 C. S. Lewis, "Kipling's World," *A Kipling Companion*. Ed. Norman Page. (London: Macmillan, 1984), 188.
- 38 Gerry Knowles, *A Cultural History of the English Language*. (London: Arnold, 1997), 136. [小野茂・小野恭子共訳『文化史的にみた英語史』（開文社出版、1999 年）、170 頁。
- 39 Raymond Williams, *The Long Revolution*. (London: Chatto & Windus, 1961), 220.
- 40 Robert McCrum, William Cran, and Robert MacNeil, *The Story of English*. (London: Faber, 1986), 272.
- 41 J. Lawson and H. Silver, *A Social History of Education in England*. (London: Methuen, 1973), 290.
- 42 Robert McCrum, William Cran, and Robert MacNeil, 322.
- 43 *Ibid.*, 330.